

「自由」雑感

なかむら ゆずる
中村 譲

日本教職員組合・書記長

仕事柄出張が多い。タクシーにもよく乗る。そんな時、私は、よく運転手に街の様子を尋ねる。高齢の運転手からは、「日本の、とりわけ大都市の『伝統』『文化』が破壊されていくのが残念だ」という話を聞かされる。「町名に象徴される街の歴史や昔なじみの商店が失われていくのが寂しい」と言う。新自由主義経済政策による規制緩和が進行している。繁華街にコンビニが立ち並ぶ。24時間営業だ。真夜中にどれだけ消費需要があるのか知らないが、5メートル四方に4軒もあるなんて風景はめずらしくない。倒産した大型スーパーの広い跡地に、また、同じようなスーパーが建つ。日本の住宅事情や景観は考慮されているのだろうか。全く自由放任でいいのだろうか。市場原理主義が吹き荒れ始めてから、もうかなりの年数がたつ。幸福に至る「予定調和」という「見えざる手」はあるのか。保守主義者たちはどう考えているのだろうか。今、日本の国家政策を、図式的に言えば、自由な経済活動を大いに奨励する。資本は自由に飛び回るから日本国としての統合を意識しないと国民がバラけてくる。そうすると「日本人としてのアイデンティティ」が失われるという。そこで「愛国心」「伝統の継承」が強調される。そして、そのことを法律に書き込もうとする。何かおかしい。個人の精神や心こそ自由でないと芸術や文化というものは生れないし、科学・技術も研究も発展して来なかつただろう。「伝統」をみつめ、「伝統」を極めるのも、「伝統」

を否定して革新していくのも個人の感性と意思だろう。革新されたものが新たな「伝統」になることもある。一人ひとりにまかせたらどうか。それほど信頼ができないか。縛りを掛けないと権力側は不安なのか。自己の政権運営に自信がないか。精神の自由な飛翔を認め、保障するのが「ゆたかな国」ではないのか。

私は労働組合の役員である。連合が掲げる「ディーセント・ワーク（人間尊重の労働）」という言葉が好きだ。労働の意味の中に全ての人間らしさ（喜び、悲しみ、苦しみ、痛み、満足など）がインクルーシブされ、温かい語感があるからだ。共に労働するところから生れる共感、連帯も。それを「抵抗勢力」などとレッテルを貼って、そこのけそこのけで本当にいいのか。

戦後60年。ヨーロッパでナチスドイツが席捲していた時、内部から抵抗した勢力はパルチザン、レジスタンスであった。今、ヨーロッパは自由か。すくなくともファシズムではない。彼らは「自由からの逃走」（E・フロム）をしなかつたのである。そして今、EUとして新しい共同体づくりの実験に挑戦している。日本はどうか。公務員に労働基本権を認めることや政労使、三者平等に同じ土俵に上がってこの国の将来を考えることが怖い。そんなに自信がないか。「自由」の名において他者や他国の「自由」を封じるのも困るし、ファシズムはもっとごめんだ。